

2021年11月5日(金)

■講義テーマ

[Fieldwork] 街の文化をかたまりでつかむ

——古本・映画・レコード・喫茶を軸として

ゲスト講師：村上 潔 [Murakami, Kiyoshi]
(立命館大学生存学研究所客員研究員)

◆集合場所・時間

〈神戸市立こうべまちづくり会館〉(入口前) 14:00

◆解散場所・時間

元町駅前 16:00

◆実施趣旨・概要

街[まち]の文化というものは、ターミナル駅にオフィスビルやショッピングセンターやアミューズメント施設があるから／できたから維持されるわけではありません。

文化の土台を構成するさまざまな分野の、さまざまな機能を担う場所が、一定の区域に密集して存在し、それらが有機的につながり、日常的に人々の流れが行き交い、モノやお金以外のやりとりが活発になされることで再生産されるものです。

それは、「トレンド」や「マーケティング」といった文脈からは距離をとった次元にあり、大きな「経済」・「消費」の観点からは見出し難いものです。「地域の活性化」といった観点で括るのも——そう括られがちですが——少しずれています。

では、なにがその根底にあるのか。私たちはどうやってその「世界」にアプローチしていけば、そのおもしろさに到達できるのか。実際に街を歩くことで、それを考えるきっかけをつかみましょう。

このフィールドワークでは、花隈エリア(元町通4丁目)から元町駅までの短い区間を歩くなかで、主に古本・映画・レコード・喫茶に関係する約30か所(予定)のスポットを紹介していきます(時間の問題、人数の問題があるので、各お店や施設の中には入りません)。

歴史、世代間継承、ジャンルへの情熱、ジェンダー……。いろいろなポイントがありますが、まずは地理的・空間的に、その様態を感じ取ってください。そして、個々の場所がもつ魅力や、エリア全体がもつポテンシャルをじっくり考えてみましょう。気になった場所は何度も再訪して、そこにいる人と話をしてみましょ。きっとそこでなにかがわかってきます。街の文化の真ん中に飛び込み、身体的に楽しむこと。その感覚をつかむことが、この講義の目的です。では歩きましょう。

◆注意点

- ◇マスク着用のこと。その他の感染症対策も十分意識して参加してください。
- ◇途中休憩はありません。飲料水を各自持参し、適宜水分補給してください。トイレは集合場所の〈神戸市立こうべまちづくり会館〉内で利用できます。
- ◇各お店の外観の写真を撮影するのは控えてください（公的施設・映画館は可）。撮影（→公開）したい場合は、後日個人的にお店を訪問して、店主さんに許可をとって行ってください。
- ◇スマートフォン等で資料を確認するのは、立ち止まったときにしてください。歩いているときは、通りの風景全体をよく観察し、視覚以外の感覚も意識して空間の雰囲気を感じ取るようにしてください。

◆資料について

本資料がメイン資料となります。サブ資料一式は、当日集合場所で直接配布します。

■行程表

▽神戸市立こうべまちづくり会館 *集合・出発地点

cf. <https://kobe-machi-kaikan.city.kobe.lg.jp/>

◇神戸元町みなと古書店【古本】

- ・ 2019年10月～
- ・ 市内で営業する7店が共同で運営
- ・ 店番は若手店主らが交代で
- ・ 〈こうべまちづくり会館〉改装にあわせ営業開始

*文献リスト参照

cf. <https://mainichi.jp/articles/20190919/k00/00m/040/211000c>

↓

◇はた珈琲店【喫茶】

- ・ 1978年～
- ・ 自家焙煎深煎り珈琲一杯点て

cf. <https://kobe.keizai.biz/headline/4/>

↓

◇サンコウ書店【古本】

- ・ 1996 年～
- ・ 2020 年 10 月にモトコーから移転
- * 文献リスト参照

cf. <https://www.sankoubooks.com/news/>

+

◇純喫茶ベア【喫茶】

cf. <http://junkissa.blog.jp/archives/1077349248.html>

↓

◇神戸古書倶楽部【古本】

- ・ 兵庫県古書組合加盟の 9 店が合同で運営

cf. <http://hirunekodou.cocolog-nifty.com/jikki/cat22512050/index.html>

+

◇マルダイ書店【古本】

- ・ 2020 年 3 月にモトコーから移転

cf. <https://www.kobe-motomachi.or.jp/shop-search/350>

↓

◇本の栞【古本】

- ・ 2020 年 9 月～
- * 文献リスト参照

cf. <https://kisspress.jp/articles/29555/>

↓

◇honeycombBOOKS* [ハニカムブックス] 【古本（絵本）・雑貨】

- ・ 2008 年 8 月～
- * 文献リスト参照

cf. https://note.com/reading_mug/n/n51d2676e5839

↓

◇元町映画館【ミニシアター】

- ・ 2010 年 8 月～
- ・ 「映画ファン立 [りつ] 」
- ・ 学生による〈映画チア部〉
- * 文献リスト参照

cf. <https://www.asahi-family.com/entertainment/29206>

cf. <http://www.cinema-st.com/mini/m060.html>

↓

(◇ワイルドハニーパイ【レコード】：最近モトコーより移転)

↓

◇Cafe Cru. [カフェ・クリュ] 【カフェ】

- ・ 2001 年～
- ・ 〈元町映画館〉（真裏に立地）との活発なコラボ

* 文献リスト参照

cf. <https://mainichi.jp/articles/20170902/ddl/k28/040/403000c>

cf. <https://motomachieigakanstory.amebaownd.com/posts/20988319>

↓

(◇レトロ倶楽部 【古本】

cf. <https://kisspress.jp/features/2723/4/>)

↓

◇花森書林 【古本・雑貨・ギャラリー】

- ・ 旧 〈トンカ書店〉（2005 年～2018 年／トアウエスト）
- ・ 2019 年 2 月移転オープン
- ・ フリーペーパーも多数常設

* 文献リスト参照

cf. https://www.kobe-np.co.jp/news/kobe/202108/p3_0014599949.shtml

cf. <http://bibou726-49.jugem.jp/?eid=245>

↓

◇ポエム 【喫茶】

- ・ 1969 年～
- ・ 海岸通 〈喫茶ラン〉を 2019 年 11 月に引き継ぎ 4 号店とする

cf. <https://kissapoem.com/>

cf. <https://www.kissa-nostalgia.net/kissa-hyogo-ran>

↓

◇古本 荒野 【古本】

- ・ 2019 年 3 月～

cf. https://twitter.com/furuhon_koya

↓

◇〈海文堂書店〉跡地

- ・ 1914 年～2013 年
- ・ 長く神戸の知的・文化的活動を支えた拠点＝象徴的存在
- ・ 現在でも元町界隈の本（古本）にまつわるシーンの「磁場」

* 文献リスト参照

cf. <https://kobe.keizai.biz/headline/1464/>

cf. ギャラリー島田：<http://www.gallery-shimada.com/01/history/index.html>

↓

(◇古本の読尊 [どくそん] 【古本】

- ・ 2016 年～)

↓

◇spacemoth/fripiet ZOMETROPE [スペースモス／フリピエ・ゾエトロープ] 【ヴィンテージ古着・雑貨】

- ・ 2001 年～
- ・ トアウエストから移転
- ・ 音楽・映画との深い関係
- * 文献リスト参照

cf. https://colocal.jp/topics/lifestyle/graeme/20160809_77306.html/3

cf. https://note.com/moviecheer_osaka/n/nc144b298ebc3

cf. 栄町ビルディング：<http://kobe-kobecco.com/archives/26872>

↓～乙仲通～

◇1003 [センサン] 【リトルプレス／古本】

- ・ 2015 年 9 月～（走水通）
- ・ 2020 年 12 月移転オープン
- ・ ジェンダー／フェミニズム関連が充実
- * 文献リスト参照

+

◇CAFE DE J'AI ME [カフェ・ド・ジェーム] 【喫茶／イベントスペース】

- ・ 1981 年～

cf. <https://kobe.keizai.biz/headline/2339/>

↓

◇M&M ジャズ喫茶 【ジャズ喫茶】

- ・ 1997 年～
- ・ 2012 年に店主引き継ぎ
- * 文献リスト参照

cf. https://www.kobejazz.jp/jazz_report/vol74.html

+

◇うみねこ堂書林 【古本】

- ・ 2014 年 4 月～
- ・ 横溝正史／ミステリー

cf. <https://book-life.net/umineko/>

cf. <https://kobecco.hpg.co.jp/9096/>

↓

(◇Gallery Vie [ギャラリー・ヴィー] 【ギャラリー】

- ・ 1999 年～
- ・ 2013 年に海岸通から移転
- ・ 《絵話塾》

cf. <https://galleryvie.jp/gallery/about.html>)

↓

◇Record Bar Braque 【レコードバー】

- ・ 2009 年～
- ・ 1970～80 年代洋邦楽

cf. https://www.kobejazz.jp/jazz_report/vol151.html

cf. <https://kobecco.hpg.co.jp/29360/>

+

◇Space eauuu 【イベント・スペース／ギャラリー／カフェ】

cf. <https://twitter.com/spaceeauuu>

↓

◇ハックルベリー 【レコード】

cf. https://www.kobejazz.jp/jazz_report/vol121.html

↓

◇エビアンコーヒーショップ 【喫茶】

- ・ 1952 年～
- ・ 関西におけるサイフォン式コーヒーの先駆け

cf. https://colocal.jp/topics/lifestyle/class-kobe/20160301_65848.html

↓

◇ジャズ喫茶 jam jam 【ジャズ喫茶】

- ・ 1989 年～
- ・ 2000 年移転オープン
- ・ リスニング席／会話席
- ・ ノーザンソウルのイベントも

* 文献リスト参照

cf. https://www.kobejazz.jp/jazz_report/vol18.html

cf. <https://kobecco.hpg.co.jp/45520/>

cf. <https://www.kobe-np.co.jp/news/odekake-plus/news/detail.shtml?news/odekake-plus/news/pickup/201809/11669665>

↓

◇ROCK'N ROLL AIDS PRODUCTION 【レコード】

cf. <https://kisspress.jp/features/2723/2/>

↓

◇汎芽舎 [はんげしゃ] 【レコード】

- ・ 2005 年～
- ・ ポストパンク／ジャーマン・ニューウェーブ

cf. <https://donutsmagazine.com/store/shirahase-tatsuya-10/>

↓

◇ちんき堂 【古本】

cf. <https://news.yahoo.co.jp/articles/7c17c809c0bb11f537c2e885125adfc66d899de7>

↓

◇りずむぼっくす神戸元町店【レコード】

cf. <https://donutsmagazine.com/store/rhythmbox/>

↓

△元町駅 *解散地点 *村上によるまとめの解説

◆さらに足を延ばせば……

◇古書ノーボ【古本】（花隈）

<https://twitter.com/koshonovo/>

◇MOKUBA'S TAVERN（木馬）【ジャズ喫茶】（トアロード）

<https://kobecco.hpg.co.jp/42224/>

◇TEA & library CORENOZ [コリノズ]【ブックカフェ】（中山手通）

<https://www.instagram.com/corenoz/>

◇清泉堂書店【古本】（三宮センタープラザ）

<https://www.seisendou-kurachishoten.com/>

◇あかつき書房【古本】（三宮センター街）

<https://akatsuki-shobo.com/>

◇茶房 JAVA【ジャズ喫茶】（三宮駅高架下）

<http://jazztownkobe.jp/spot/java/>

■要点整理——考えること

◆空間的な流れ＋行動様式

①古本を買う→喫茶店で読む

②映画館で映画を観る→喫茶店で議論する

③ジャズ喫茶でレコードを聴く→そのレコードを探しにレコード屋へ

+

・演劇を観る

・ライブに行って音楽を聴く

・ディスコ／クラブで踊る

+

・古着屋で服を買う

・雑貨屋でアクセサリ等を買う

・居酒屋やバーでお酒を飲む

……まずは実践してみる→歴史を知る

◆鍵になる概念

- ◇身体性——歩く・語る・味わう・酔う……
- ◇共同性——（親しい／見知らぬ）誰かと場をともにすること
- ◇都市性——流入と流出／近代化の進展（産業・流通・建築）／学生文化
……それらを全体として捉えること

◆変わる／変わらない要因

- ◇環境——都市再開発による空間とコミュニティの変容
- ◇時代——1960・70年代の政治・文化状況からの距離
- ◇世代——「若者文化」の変質／代替わりして引き継がれていくもの
- ◇ジェンダー——担い手・訪問者層が年長男性→若年（若手）女性へと徐々にシフト
……それらがどのように現象として表れているのか

◆街を歩くこと・街を感じる／街で出会うこと・街に働きかけること

- ◇それによって私たちの生活・感受性・価値観・行動・コミュニティはどのように変わってきたのか／いくのか——を考える
- ◇自分たちではどうすることもできないように思われる街の「変化」に対してできることはなにか——を考える

■文献

◆古本＋神戸（＋「女子」）

- ◇奥村千織 202110 「店の色」, 『群像』76(10): 555-557
- ◇上杉順子 20210818 「ソロでも楽しい夏休み(3) 古書店めぐり 時空を超えた旅へ」, 『神戸新聞』

(<https://www.kobe-np.co.jp/news/kobe/202108/0014599949.shtml>)

“神戸・元町（神戸市中央区）には古書店が多い。ページを開き想像力の翼を広げれば、コロナ禍でも即座に“旅”に出られるのが読書のいいところ。絶版本も並ぶ店では、タイムトリップだってできる。密にならない単独で、個性あふれるお店をはしごするとしよう。”

- ◇韓光勲 20210517 「個人出版物：神戸の書店「1003」、個人出版物100種超 作り手の熱い思いに触れて 元司書の店主、お勧めずらり」, 『毎日新聞』兵庫版, 20210515 「個人出版本100種以上「熱量こもった作品に触れて」神戸の書店」, 『毎日新聞』 (<https://mainichi.jp/articles/20210515/k00/00m/040/035000c>)

“神戸市中央区の書店「1003（センサン）」は新刊と古書を置く傍ら、100種類以上のリトルプレス（個人出版物）を取り扱っている。店主の奥村千織（ちおり）さん（41）は大学図書館で司書として働いた経験を生かしてバラエティー豊かな本で店を彩り、「作り手の熱量がこもった本に触れ

てほしい」と話している。”／“最近はジェンダー（社会的性差）への理解を深める本を並べることが増えた。ニューヨーク在住の作家、ケイト・ザンブレノ著の「ヒロインズ」（西山敦子訳）で、文学史の陰に隠れた女性たちを知ることができたという。奥村さんは「すぐに人生の役には立たなくても、作り手の思いが伝わる本に触れ、新たな世界をのぞいてみてほしい」と話す。”

◇木田智佳子 20201013 「[ひょうごで暮らす]「神戸・元町 古書のまちに 新規店続々、老舗も健在」, 『毎日新聞』兵庫版, 23

(<https://mainichi.jp/articles/20201013/dtl/k28/040/205000c>)

“神戸元町商店街（神戸市中央区）と周辺に古書店が増えている。元町通3～4丁目ではこの1年半あまりで移転を含め6店がオープン。若い店主や、従来の「古本屋」のイメージを覆すおしゃれな店も登場している。ときは灯火親しむ、読書の秋。元町古本事情をのぞいた。”

◇木田智佳子 20200627 「古本屋には四季がある 定年後に開業、神戸・片岡さんがエッセー集 人や本との出会い、柔らかく」, 『毎日新聞』兵庫版

(<https://mainichi.jp/articles/20200627/dtl/k28/040/290000c>)

“神戸市兵庫区で小さな古書店を営む片岡喜彦さん（72）が、エッセー集「古本屋の四季」を出版した。定年退職後、夢をかなえて7畳ほどの店の主（あるじ）となり11年。本を手放す人、探し求めて訪れる人たちとの日々のふれ合いが柔らかな文章でつづられ、古本から垣間見えるたくさんの人生への慈しみが伝わってくる。”

◇木田智佳子 20200425 「新型コロナ 営業？休業？揺れる古書店 「今できること」発信の店も」, 『毎日新聞』兵庫版, 22

=20200421 「臨時休業の古書店で「誰もいない展覧会」 神戸・元町 花森書林ホームページで」, 『毎日新聞』

(<https://mainichi.jp/articles/20200421/k00/00m/040/138000c>)

“外出の自粛で人通りが少なくなった神戸のまちで、古書店主らが「店を開け続けるべきか、休むべきか」と揺れている。個人経営の小さな「古本屋」は県の休業要請の対象外だが、店が狭いこともあり、客足が遠のきがちだ。そんな中でも「今できることを」と、シャッターを下ろした無人の店内で展覧会を開き、インターネットのホームページで発信を始めた店もある。”／“店主の森本恵さん（40）は、新型コロナウイルスの感染が拡大してから、「大丈夫？」と顔を見せてくれるなじみの客らに伝えようと、悩みながらも店を開けていた。営業時間の短縮も考えたが、子どもの保育園が休みになったこともあり臨時休業を決めた。”／“2人で話すうちに「誰もいない展覧会」のアイデアが浮かんだ。「不安はつきまとうけれど、少しでも歩みを進めよう」と、さっそく準備に取りかかった。”

◇平野愛 20200131 「[私を本屋に連れてって] 安田謙一さん、神戸・元町の「1003—センサー」に連れてって」, 『好書好日』

(<https://book.asahi.com/article/13085666>)

“1003の奥村さんがとても心強いことをおっしゃってくれたんですよ。近頃は本って売れないと言われてるけど、場所とタイミングと物があれば売れるんだ、って。それを聞いて、また本を作りたい、何軒かの面白い〈場所〉に置いてもらいたい、って思うようになりました。”

◇木田智佳子 20200123 「イラストでめぐる神戸の古本屋 じわり人気「古書女子」も 神戸で27日まで作品展」, 『毎日新聞』

(<https://mainichi.jp/articles/20200123/k00/00m/040/152000c>)

“神戸・平野商店街（同市兵庫区）にある老舗古書店「イマヨシ書店」の4代目店主、今吉祝（はじめ）さん（57）のイラスト原画展「古本屋にこう 古本屋店主が古書店を巡り描く作品たち」が、同市中央区元町通3の古書と雑貨の店「花森書林」で開かれている。27日まで。”

◇20190924 「神戸元町みなと古書店：元町に古書の新風 来月1日、共同運営店開業「限定市」好評受け」, 『毎日新聞』兵庫版, 22

=20190902 「古本1万冊以上 神戸元町に新しい古書店が10月オープン」, 『毎日新聞』 (<https://mainichi.jp/articles/20190919/k00/00m/040/211000c>)

“神戸市の元町に古本1万冊以上を集めた「神戸元町みなと古書店」が10月1日にオープンする。市立こうべまちづくり会館（神戸市中央区元町通4）の改装に合わせ、1階で営業を始める。近くの元町高架通商店街（通称モトコー）などには中古の雑貨や古着の店も並び、リサイクルの文化が根付くエリア。若手の古書店主らが共同で運営し、幅広いジャンルの古書が並ぶ予定で、新しい風を吹き込みそうだ。”/“同商店街では、新刊を扱う老舗「海文堂書店」が2013年9月に閉店。「気軽に立ち寄れる本屋さんが少なくなった」とささやかれていた。17年には、海文堂書店の元店員や近くの古書店主、出版社関係者がイベント「『海の本屋』復活スペシャル」を開催。18年には、会館の有効活用法を探る社会実験として、今回の古書店開設に参加する7店による期間限定の古書市も2回開いた。好評だったことから、今回のオープンが決まった。”

◇20161213 「神戸 BAL で「冬の古本市」 口笛文庫とトンカ書店がコラボ」, 『神戸経済新聞』 (<https://kobe.keizai.biz/headline/2509/>)

“両店舗が開業10周年を迎えたことを記念して、昨年12月に初めて同イベントを開催。「普段の古本市とは違った神戸らしい雰囲気とのことで大変好評を得た」（森本さん）と2回目の開催が実現した。販売ジャンルは、絵本、洋書、写真集、文学、美術、CD、雑貨など。”

◇20160420 「神戸の古本屋が団結、巡る楽しさ提案」, 『Lmaga.jp』

(<https://www.lmaga.jp/news/2016/04/10024/>)

“小さなお店ながらもそれぞれ個性が光る「エメラルドブックス」「honeycombBOOKS*」「トンカ書店」「ワールドエンズ・ガーデン」の4軒が「コウベボーダーズ」という名称で3年前からイベントを開催。閉店したお店が出て、ずっと続けてきた。”

◇20151022 「神戸・トアウエストの「ザックバランな古本屋・トンカ書店」が10周年」, 『神戸経済新聞』 (<https://kobe.keizai.biz/headline/2148/>)

“開業前は書籍に関する仕事に就いていたという森本さんは出店のきっかけについて、「『ザックバラン』を合言葉に老若男女さまざまな人が行き交う大人の駄菓子屋のような店をやりたい」と明かす。2012年からほぼ毎月開講している元図書館員・中西美季さんによる絵本講座では、作家を1人ずつ取り上げて、その生涯と作品を時系列で紹介。一つの絵本がどのような背景をもって生まれたのかなど、読み聞かせをすることで、絵本の魅力をあらためて感じる機会も設けてきた。”

◇20110617 「神戸・海文堂書店で「女子の古本市」——「女子の古本屋」刊行記念で」、『神戸経済新聞』 (<https://kobe.keizai.biz/headline/802/>)

“「神戸で古本屋を営む女性店主らと地域活性化につながるようなイベントをしたいと以前から話していた」と同店イベント担当の北村知之さん。「若い人や女性に限っては、まだまだ古本に触れる機会は多くなく、古本屋・古本市へのなじみも薄い。神戸での古本、古本屋の可能性を広げるチャンスになればと思ひ企画した」と話す。”

◇岡崎武志 [2008] 20110608 『女子の古本屋』, 筑摩書房 (ちくま文庫)

* 「若者もお年寄りも気軽に——トンカ書店・頓花恵さん」

<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480428370/>

“いま女性店主の古書店が面白い！ネットはもちろん、リアル書店でも、個性的な品揃え、雑貨やおしゃれなカフェ、イベント・スペースなどを兼ねることで、注目を集めている。そうした個性的な13人の店主の素顔と開業までのストーリーを紹介した好著。本書がキッカケで独立した女子もいるという一冊。文庫化にあたり、「それからの『女子の古本屋』」を増補・追加取材。”

◇20110124 「神戸の「ザックバラな古本屋・トンカ書店」、ギャラリー設置から丸5年」、『神戸経済新聞』 (<https://kobe.keizai.biz/headline/683/>)

“本好きのオーナー頓花 (とんか) 恵さんの名字から名付けられた同店は、新旧問わず幅広いジャンルの古書を扱う古書店で、店内には古書約3,000冊と雑貨小物などが並ぶ。昭和30年代のコミックソングが流れる店内には、ソファでくつろぎながらお茶を飲める小さな喫茶コーナーも設け、その壁面3面はギャラリースペースになっている。”

◇20100810 「神戸・元町の女性向け古書店「ハニカムブックス」、2周年で記念フェア」、『神戸経済新聞』 (<https://kobe.keizai.biz/headline/573/>)

“同店は絵本や料理、手芸、女性エッセーなど女性向けの古書を扱う古書店。雑居ビル2階にある9坪の店内では食器やポストカード、アクセサリなどの雑貨も販売。古本の買い取りも行っている。店名の「ハニカム (「ハチの巣」の意味)」は、もともと「ハチ」や「ハニー」という言葉が好きだった佐伯さん自ら命名。”

◇20080808 「神戸・元町にセレクト古書店——20代女性が開業で夢かなえる」、『神戸経済新聞』 (<https://kobe.keizai.biz/headline/37/>)

“佐伯さんは「3年前から雑貨店などに自分がセレクトした本や雑貨を置いてもらっていたが、回りの方々に支えられて小さいながらようやく自分の店を持つ事ができて幸せ。訪れてくれた人には、街の古本屋さんでは見つからない『お気に入りの宝物』を見つけてほしい」と話す。”

=+=+=+=+=+=+=+=+=+=+=+=+=+=+=+=

◇近代ナリコ 2008 「古本屋になった女たち——岡崎武志著『女子の古本屋』」, 筑摩書房 (https://www.chikumashobo.co.jp/pr_chikuma/0804/080402.jsp)

“いろいろないきかたがあるのだな。それはとりたてて、女性で、しかも古本屋の店主だからというわけでもないだろうが、これまであまたの古本屋をめぐり歩き、その姿を私たちに伝えてきてくれた岡崎さんのこのたびの仕事に接してまずえたのは、そんなシンプルな感想である。| 本書の連

載時のタイトルは「古本屋は女に向けた職業」だが、はたしてどうだろう。こうして「女性の古本屋店主」がならべられることじたい、これまではそうではなかったことを示しているといえる。”

◇近代ナリコ 20040110 「[古本の未来形] 古本から知る・女の来し方行く末」, 『i feel』27(2004 Winter), 紀伊国屋書店

(https://www.kinokuniya.co.jp/05f/d_01/back36/no27/tokushu27/tokushu05_27.html)

“古本好きといえば、かつてはおおかたが男性で、若い女の出る幕ではなかったし、そうしたなかで培われていく「蔵書」なるものも、ほとんどが男性のそれ。時代の古いものでないかぎり、女のための本というのは、用が済んだあとの行く先は、古本屋さんよりも、古紙回収や地域のバザーなどだったりする。そんななか、女性のための本たちが残らずに消えていってしまうのがしのびない、という思いがあった”

◇『ほんまに』（編集・発行：くとうてん）

<http://www.honmani.net/backnumber.html>

- ・ Vol.19 特集：わたしたちの少女文化
- ・ Vol.16 特集：続・神戸の古本力
- ・ Vol.15 特集：新刊書店と本の話 [街の本屋] ——海文堂書店閉店に思う

◆海文堂書店

◇木田智佳子 20170219 「13年に営業終了“海の本屋”限定復活 元店員、ゆかりの人尽力 来月18・19日、物販や講演」, 『毎日新聞』兵庫版

(<https://mainichi.jp/articles/20170219/ddl/k28/040/259000c>)

“企画したのは、海文堂書店を拠点に交流のあった同区内の「トンカ書店」や出版社「くとうてん」の関係者ら。元店員の平野義昌さん（63）が著した「海の本屋のはなし 海文堂書店の記憶と記録」（15年、苦楽堂刊）の出版にあたり「刊行会」を結成。多くの人に本を手にとってもらえる機会をと模索していたところ、地域活性化やまちづくり活動の施設である同会館で、新たな活用の可能性を探るイベントとして開催できることに […]”

◇201508 「海文堂最後の店員がまとめた『海の本屋のはなし——海文堂書店の記憶と記録』出版」, 『KOBECOCO』2015年8月号 (<https://kobecoco.hpg.co.jp/12020/>)

“一昨年、本の虫に惜しまれながら閉店した、元町3丁目の海文堂書店。その創業時からの歴史と、99年の歴史に幕を下ろすまでの顛末を、元書店員である平野義昌さんがまとめた『海の本屋のはなし』が苦楽堂から出版された。少ない資料から掘り起こされた創業時のことから、「われわれはよい書籍を出版しよう」という言葉を残した岡田一雄の人となり、ギャラリーを開設した島田誠さんの時代を振り返り、最後には閉店までの平野さんの日記を綴る。”

◇平野義昌 20150707 『海の本屋のはなし——海文堂書店の記憶と記録』, 苦楽堂

https://honto.jp/netstore/pd-book_27241213.html

◇20140604 「海文堂書店：昨年閉店、幻の誕生100年イベント 古本市やゆかりの作家展——中央区のギャラリー、11日まで」, 『毎日新聞』兵庫版, 24

◇20130806 「海文堂書店：ミナト神戸の老舗、惜しまれ9月閉店 「活字離れ」「ネット販売」の波に押され」、『毎日新聞』兵庫版，22

“同書店は70年代から品ぞろえを広げ、総合書店になり、より幅広い客に親しまれた。1995年の阪神大震災では、約15万冊の書籍が床に散らばったが、床にひびが入る程度で済んだ。85年から勤める店長の福岡宏泰さん（55）らスタッフは避難所から店に通い、懐中電灯やランプを手に一冊一冊棚に戻して、8日後に営業を再開した。|再開後、被災した家族や友人を探すために訪れた人が神戸の地図を買い求め、受験シーズンの前だったため多くの学生が参考書などを購入した。余震で不安がる子どもに絵本を読んであげたいと願う母親たちも訪れたという。”

◆元町映画館

◇元町映画館出版プロジェクト編（責任編集：江口由美） 20210821 『元町映画館ものがたり—一人、街と歩んだ10年、そして未来へ』，神戸新聞総合出版センター

<https://kobe-yomitai.jp/book/1256/>

◇《特設サイト：元町映画館ものがたり》

[\(https://motomachieigakanstory.amebaownd.com/\)](https://motomachieigakanstory.amebaownd.com/)

・「刊行にあたって」

<https://motomachieigakanstory.amebaownd.com/pages/5131912/concept>

・20210906 「「ここに、ともしびがある」8/27神戸の達人と語る、街と映画館の過去

・現在・未来 | 金田明子 / 高濱浩子」

<https://motomachieigakanstory.amebaownd.com/posts/20988319>

“書籍「元町映画館ものがたり」刊行記念 RYUSUKE HAMAGUCHI 2008-2010 Works PASSION/THE DEPTHS と題して8月21日より1週間に渡って開催した上映&トークセッション。|最終日の7日目は『PASSION』上映後、書籍のコラムでも掲載させていただいた元町映画館とは開館時からのおつきあいで、毎年周年クッキーを作っていた Cafe Cru.店主の金田明子さん。そして元町商店街で生まれ育ち、自身でも両親の文具屋を引き継ぎ、伝説の雑貨店「アンニュイ」を営んでいた画家の高濱浩子さんをお迎えし、元町の過去から現在、そしてお二人がその元町でどのような人生を歩み、そこに元町映画館がどのような場所として存在していたのか、これからの期待などを語っていただいた。”

・20210904 「「リモートは便利だが、リアルで会うことが大事」8/26映画館どうしの繋がりに見る未来 | 松村厚 / 山崎紀子 / 吉田由利香」

<https://motomachieigakanstory.amebaownd.com/posts/20905545>

“書籍「元町映画館ものがたり」刊行記念 RYUSUKE HAMAGUCHI 2008-2010 Works PASSION/THE DEPTHS と題して8月21日より1週間に渡って開催した上映&トークセッション。|6日目は『THE DEPTHS』上映後、元町映画館初の製作配給作品『まっばだか』をはじめとする宣伝を手がけ、次世代映画ショーケース実行委員会委員長の松村厚さん、シネ・ヌーヴォ支那人の山崎紀子さん、京都みなみ会館館長の吉田由利香さんをお迎えし、「映画館どうしの繋がりが

ら見る未来」と題して京阪神の連携の歴史や、「Save our local cinemas」プロジェクトが誕生するまでの経緯、そして1年経った今の状況などを語っていただいた。”

◇202110 「『元町映画館ものがたり』奮闘の10年間を一冊に。」、『KOBECOCO』2021年10月号 (<https://kobecoco.hpg.co.jp/63692/>)

“2010年に元町商店街に誕生したミニシアター「元町映画館」。10周年を記念して発行した『元町映画館ものがたり』は、映画ファンと街の人びとがともに育んできた歩みと、映画の未来への想いがぎゅっと詰まった一冊に。映画を通じた同志でもある、著者×支配人のお二人にコロナ禍のこと、ミニシアターの現状を伺いました。”

◇金子恭未子 20210827 「[映画館で待ってます：第4回] 私立でも公立でもなく“映画ファン立”の劇場：兵庫 元町映画館編」、『映画ナタリー』 (<https://natalie.mu/eiga/column/442003>)

“今回は兵庫県にある元町映画館取材した。元町商店街の通りに佇む同劇場は、2010年に映画ファンが集まり作った“映画ファン立”の劇場だ。|このたびの取材では、オープンから劇場を支えてきた支配人・林未来にインタビューを実施。名作からカルト映画、ドキュメンタリー、ホラー、インディーズ作品など多種多様な作品を上映することの意味や、今後劇場が目指す姿などを聞いた。”

◇20210818 「神戸の元町映画館が開館11周年へ その歴史と映画館への想い記した書籍が発売」、『キネプレ』 (<http://www.cinepre.biz/archives/27346>)

“同著の責任編集を務めるのは映画ライターの江口由美さん。| 昨年の緊急事態宣言にあわせて映画館が閉館した際、映画ライターとしてできることはないかと模索していたところ、元町映画館の社員を兼ねることとなり、会議で10周年記念誌のことが話題になったという。| 「試行錯誤を重ねる同館の歴史と現在進行形の動きを克明に記録し、後世に残し、より多くの方に知ってもらうために、書籍にして出版したい。そう思い、気がつけば自分も担当に名乗りでていました」と振り返る。”

◇小津はるか 20210401 「【元町映画館 林 未来】ミニシアターから愛を込めて——映画がある限り、わたしたちがいる」、『GQ JAPAN』 (<https://www.gqjapan.jp/culture/article/20210401-mirai-hayashi-movie>)

◇20200601 「元町映画館の営業再開にあわせ、映画チア部×関西大学映研の短編がWeb公開」、『映画ナタリー』 (<https://natalie.mu/eiga/news/381359>)

“新型コロナウイルス感染拡大の影響で休館していた神戸・元町映画館と、同館を拠点に活動する映画チア部による短編映画「アワータイム」のスピノフとして制作された本作。[...] 前作「アワータイム」は制作側の予想を超える2000回以上の再生回数を記録。スタッフによると「多くの反響を呼び、休館中の元町映画館を後押しする大きな起爆剤となりました」という。”

◇20200511 「元町映画館×映画チア部のリモート制作映画がYouTubeで公開」、『映画ナタリー』 (<https://natalie.mu/eiga/news/378612>)

“新型コロナウイルス感染拡大の影響により休館中である元町映画館のスタッフが企画し、同館を拠点に活動する学生団体・映画チア部が協力して作られた本作。[...] 元町映画館の石田涼は「リ

[...] 言い方は悪いかもしれませんが素人でも映画を作れるチャンスでもあります。在宅で自分の使っている PC やスマホ、これさえあれば映像は撮れます。この状況を逆手にとって映画館のスタッフが映画を制作したら面白いのではないかと、そういったところから企画がスタートしました」と企画経緯を説明した。”

◇20180608 「「学生にミニシアターの魅力を伝えたい！」学生による映画宣伝隊・映画チア部インタビュー」, 『キネプレ』 (<http://www.cinepre.biz/archives/24055>)

“関西のミニシアターの魅力を伝える学生による学生のための映画宣伝隊「映画チア部」。2015年4月に神戸の元町映画館を拠点に活動をスタートした。今回は、6/2(土)にバルシネマしんこうえんで行われたオールナイト上映前に映画チア部の部員である繁原実沙さんにお話を伺った。”

◇20160128 「「映画には学生の力が必要！」元町映画館の映画チア部が2期生募集」, 『キネプレ』 (<http://www.cinepre.biz/archives/19364>)

“「映画チア部」は、2015年4月に、神戸の元町映画館を拠点に結成されたチーム。学生によって構成されており、元町映画館をはじめとした関西のミニシアターの魅力を伝えるべく活動してきた。所属しているのは、関西の大学・専門学校生たち。|「若者の映画館離れ」が叫ばれるようになって久しいが、特に観客が高齢化しているミニシアターにおいて、学生主導の盛り上げが注目を集めている。”

◆その他：今回の訪問先に関連して

◇映画チア部大阪支部 20210829 「spacemoth/fripier ZOETROPE オーナー、豊田香純さんにインタビューを行いました!」, 『映画チア部大阪支部 | note』

(https://note.com/moviecheer_osaka/n/nc144b298ebc3)

“神戸の栄町ビルディングの3階に豊田香純さんがオーナーを務めるお店「spacemoth/fripier ZOETROPE」があります。映画チア部大阪支部ではこれまで上映会の際にタイアップをしていただいご縁のある素敵なお店です。実際部員の半数以上がお店で買い物を楽しんでいます。豊田さんとの会話の端々からお洋服だけでなく映画や音楽への愛が感じられる…それなら掘り下げて更にお話を聞かせていただこう! ということでインタビューをさせていただきました。”

◇木田智佳子 20170902 「みんな笑顔に カフェ経営の金田さん、元町映画館とコラボ 上映作品ちなんだデザインを販売中」, 『毎日新聞』兵庫版

(<https://mainichi.jp/articles/20170902/dtl/k28/040/403000c>)

“映画とコラボのクッキーはいかが? —。 [...] 神戸市中央区でカフェを経営する金田明子さん(45)が、近くのミニシアター「元町映画館」とタイアップし上映作品にちなんだクッキーをカフェで提供している。”/“金田さんは、料理教室講師やケーキ職人として勤めた後、2001年に元町通4の通りに「Cafe Cru. (カフェクリュ)」を開店。近郊野菜を使った食事や飲み物のほか焼き菓子を製造販売、注文を受けオリジナルケーキも作る。”

◇《この町の喫茶書店——あなたの町のどこかに、本が読める、買える喫茶店。》

(<https://honeybooks.exblog.jp/13803174/>)

2011年11月1日～11月24日

- ・灘エリア：「口笛文庫 × まるも珈琲店」（会場：まるも珈琲店）
- ・トアウェスト：「トンカ書店 × モトマチ喫茶」（会場：モトマチ喫茶）
- ・元町：「サンコウ書店 × コーヒーとお酒 スジャーター」（会場：コーヒーとお酒 スジャーター）
- ・花隈：「honeycomb BOOKS* × カフェ ハル」（会場：カフェ ハル）
- ・平野：「古書片岡 × HiTo Coffee Beans」（会場：HiTo Coffee Beans）

◆モトコー（元町高架通商店街）

◇小谷千穂 20210330 「モトコー今昔 番外編 ラーメン店・来来亭 古書店・サンコウ書店」, 『神戸新聞 NEXT：兵庫おでかけプラス』

(<https://www.kobe-np.co.jp/news/odekake-plus/news/detail.shtml?news/odekake-plus/news/pickup/202103/14195221>)

“古書店「サンコウ書店」は、西川和秀さん（61）が1996年に開いた。 […] 幼い頃見た古書店で、専門的な会話で盛り上がる店主のおっちゃんや常連客が楽しげだったからだ。 | 開店すると、個性的な客が出入りし、朝から晩まで雑談する日々が始まった。話すために順番待ちする人もいた。楽しくて「一生モトコーでやっていこう」と思い始めた頃、再整備事業の話が飛び込んできた。 […] 頭上から聞こえる電車の音がないのが物足りず、今は無理やり洋楽などを流している。 | 幼い頃に見た古書店そのままに、楽しく営業し続けたい。新たな場所でも“モトコーらしさ”を追求していく。”

◇辰巳直之・秋山亮太 20200610 「解体進むモトコーの柱に闇市の記憶 華僑の屋号名が続々出現」, 『神戸新聞 NEXT』

(<https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/202006/0013412612.shtml>)

“新装に向けた解体工事が進む神戸市中央区のJR神戸線元町－神戸間の高架下にある「元町高架通商店街」（通称・モトコー）で、高架橋の柱に書かれた古い漢字があらわになった。記されていたのは、「隆昌洋行」など華僑の流れをくんだとみられる会社名。辺りに闇市があった戦後に書かれたとみられるが、経緯は不明。突如現れた昭和の“遺産”に、商店街の関係者は驚き、懐かしさも口にする。”

◇長尾亮太 20200327 「74年の歩みに幕、喫茶「ホワイト」27日閉店 「生まれ変わってもモトコーで」」, 『神戸新聞 NEXT：兵庫おでかけプラス』

(<https://www.kobe-np.co.jp/news/odekake-plus/news/detail.shtml?news/odekake-plus/news/gourmet/202003/13226497>)

“JR神戸線元町－神戸間の元町高架通商店街（通称・モトコー、神戸市中央区）で、終戦翌年に開業した喫茶店「ホワイト」が、27日の営業を最後に閉店する。店主の安原由明さん（84）、初子さん（84）夫妻にとって、2人の出会いの場でもあった店は人生そのもの。閉店を惜しむ常連客が絶えない中、長年抱いてきた思いをあらためて強くした。「生まれ変わってもモトコーで喫茶店をやりたい」”

◆神戸の喫茶店

◇小谷千穂 20201112 「薫る街 還暦過ぎた「昭和喫茶」」, 『神戸新聞』

(<https://www.kobe-np.co.jp/news/kobe/202011/0013858335.shtml>)

“57年にオープンした喫茶店「ロビン」(同市中央区海岸通2)は、この地で長年愛されてきた。|「作業ズボンに(荷物を引く)手かぎをぶら下げた男の人たちを『乙仲さん』と呼んでね。毎朝、事務所に寄る前に気に入った店でモーニングを食べたりコーヒーを飲んだりしていた”/“JR元町駅前の穴門商店街の一角では、52年創業の「エビアン」(元町通1)がにぎわいを見せる。サラリーマンや近くの商店主、買い物客や画廊帰りの芸術家と客層は幅広く、カウンターの向こうでサイホンが休みなく働く。”

◇ [連載] 喫茶店ものがたり

『神戸新聞』: 001 (2016/04/05) ~ 112 (2019/04/27)

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/kissaten/>

- (1) エビアンコーヒー (神戸市中央区) (2016/04/05)

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/kissaten/201604/0009740199.shtml>

◆〈KOBE 喫茶探偵団〉

◇涌嶋克己 20210210 「[もらった種とまいた種 11] 探して、味わって、発表して」, 『神戸新聞』

(<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/essay/202102/0014069787.shtml>)

“「なくなってしまってから話すのもええけど、ちゃんと店があるうちに、店主と出会って紹介できるように、皆がそれぞれ探偵団になって、そんな人や店を見つけては報告したりしたいなア…」と話していた。|すると、トンカちゃん(森本恵さん)が「私も、その探偵団に加わりたい!」と言い、その横で客として来ていた太田朋さん(イラストレーター・絵本作家)も「私も加わりたい!」と言い、そんならみんなで「喫茶探偵団」をつくろう!!と、みんなの心がノリノリになり「KOBE 喫茶探偵団」の誕生となった。”

◇木田智佳子 20161013 「KOBE 喫茶探偵団: レトロ喫茶店の今昔を記録に 神戸の下町、百軒近く訪問」, 『毎日新聞』兵庫版, 24

“神戸在住の写真家、永田収さん(63)、イラストレーターの涌嶋克己さん(66)らが、気になるレトロな喫茶店を訪ね歩き記録に残す活動をしている。「KOBE 喫茶探偵団」。コーヒーの香りに包まれ店主と会話し、店の今昔をイラストや文章でノートに記す。昭和の時代から町に息づく喫茶店を「後の人とも共有できる情報としてとどめたい」としている。”/“かつては、そこに行けば知った顔に会い交流があった」と60代以上のメンバーは語り、「コーヒー豆を輸入する港、労働者らが憩う大衆喫茶など、神戸には喫茶文化発展の素地があった」と考察する。永田さんは「カフェなど今風の店も多い今、昔ながらの喫茶店に目を向けてみるのも面白い。歴史には残りにくい店や町の話記録しておきたい」と話す。”

◆神戸のジャズ喫茶

◇涌嶋克己 20210113 「[もらった種とまいた種 10] 味わったのは、あたたかな空気」, 『神戸新聞』

(<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/essay/202101/0014002490.shtml>)

“1995年1月17日の震災の日から1カ月ほどたった頃、神戸・元町でアンニユイという雑貨店をしている画家の高濱浩子さんからボクに相談がありました。|「震災で、電車も動いてないので、元町通を、東へ西へ、リュックを背負って、疲れた顔をして歩いている人に、少しでも元気になれることを何かしたいんやけど…」[…]|「そうや、ほんのつかの間でもホッとひと息できるんやったら、コーヒータイトなんか、ええんちゃうかなア…」。そう思い立ち、ボクたちは、「木馬」や「JAMJAM」「AZUMA」等、友人のジャズ喫茶のマスターたちに声かけをした。「コーヒード豆はあるし、水もある。紙コップにコーヒを入れて無料でくばって、みんなに『ほっ』としてもらう！」とマスターたちからのうれしい提案があった。”

◇20180427 「ジャズ喫茶：地下空間で大音量に浸る 真剣勝負、私語厳禁席も 神戸・元町」, 『毎日新聞』高知版, 23

“日本のジャズ発祥の地とされる神戸。繁華街・元町の一角に、大音量で音楽にどっぷり浸れる地下空間がある。ジャズ喫茶「jamjam (ジャムジャム)」。「お客さんの好みを外さないよう毎日が真剣勝負。あるべき姿を貫きたい」。店主池之上義人さん(65)のたゆまぬ探究心が、世代を超えて愛されるゆえんだ。”/“震災を経て「ジャズ喫茶の可能性について、より考えるようになった」。還暦を超え、音量や音質を追求したい思いも強まっている。「プレーヤーに針を落とした瞬間、死ねたら最高だね」。今日も、こだわりの音色を響かせる。”

◇内橋寿明 20121023 「ジャズ喫茶：亡き「ママ」の思い引き継ぎ…再開 常連客の桶口さん店主に――神戸・元町」, 『毎日新聞』兵庫版, 25

“店主が今年6月に急逝したため一時閉店していた神戸・元町のジャズ喫茶「M&M」[…]が、23日から再開する。常連客だった桶口優さん(31)＝神戸市長田区＝が店主となり、所蔵する約2000枚のレコードやオーディオ機器といった内装をそのまま引き継ぐ。レジャーの多様化などでジャズ喫茶の閉店が全国的に相次ぐ中、ファンにはうれしい知らせとなった。”/“6月末には店内でお別れ会を開催。代々のアルバイトを務めた神戸大軽音楽部JAZZの元部員や常連客が訪れ、思い出話に花が咲いた。池之上さんの死後、閉店を知らせる店入り口の張り紙には「必ず再オープンして下さいね」「ガンバレMM 待ってるヨ！」と存続を望む書き込みが寄せられていた。”

◆神戸のロック喫茶

◇涌嶋克己 20211013 「[もらった種とまいた種 19] ロック喫茶での約束」, 『神戸新聞』 (<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/essay/202110/0014757152.shtml>)

“アルバイトをしながら絵を描いていたのだけれど、1970年代初めの頃、ブリティッシュやアメリカンロック、日本のフォークロックなどを聴かせてくれるロック喫茶が神戸にたくさんあった。|

当時ロック喫茶でボクは音楽を聴きながら、これからのことを考えたり、少しつかれた自分の心を休めたりしていた。”

◆神戸文化

◇西村しのぶ 2001 『西村しのぶの神戸・元町“下山手ドレス”』，角川書店（ニュータイプ100%コミックス）

<https://www.kadokawa.co.jp/product/199999853145/>

◇島田誠・森栗茂一 2004 『[カラー版] 神戸——震災をこえてきた街ガイド』，岩波書店（岩波ジュニア新書）

<https://www.iwanami.co.jp/book/b269150.html>

“大震災から10年、モダニズムと庶民の街はいま、どうなっているのだろうか。繁栄のはじまりの地、文明開化の窓口、変貌した商店街。はなやかな歴史と痛切な記憶が、光と影となってただよう。復興へ力をあわせる人、アートにかけける若者、震災体験を伝えようとする人たちの姿もまじえ、神戸を歩き、学ぶためのガイドブック。”

◇安田謙一 2015 『神戸、書いてどうなるのか』，ぴあ

<https://book.pia.co.jp/book/b499240.html>

“ガイドブックには載らない神戸案内！ 神戸在住の“ロック漫筆家”安田謙一、初の全編書き下ろしによる神戸エッセイ！ 独自の視点で切り取った神戸のいろいろ。喫茶店、居酒屋など飲食店、書店、映画館、美術館のほか、神戸を題材にした本や映画、そして失われた神戸の景色。”

◇村上潔 20160400 「【美の散歩道 46】アート／書物の枠を超えて形成される文化の場」，島田誠ほか編『Gallery SHIMADA & Art Support Center Kobe INFORMATION 2016.4』，ギャラリー島田／アート・サポート・センター神戸

<http://www.arsvi.com/2010/1604mk.htm>

◆古本＋街歩き

◇岡崎武志 2015 『気まぐれ古本さんぽ——2006→2014』，工作舎

<https://www.kousakusha.co.jp/BOOK/ISBN978-4-87502-468-2.html>

“「青春18きっぷ」を握りしめ、向かうは全国津々浦々の古書店。心をくすぐる店頭均一本をリュックに放り込んで、次なる街へ。散策途中に思わず口ずさむのは、奮闘する新店舗への応援歌、そして消えゆく老舗へのエレジー……。古本を通した街歩きの楽しさが堪能できる漫遊随筆を集大成。「古本屋へ行くために明日がある。それだけでも、生きる勇気が湧いてくるのだ」——”

◇南陀楼綾繁 2015 『ほんほん本の旅あるき』，産業編集センター

<https://www.shc.co.jp/book/865>

“全国に広がるブックイベント「一箱古本市」の発案者が、全国の個性的な本屋さん、変わり種の本にまつわるスペースをゆる〜く紹介。そこで出会ったまち、ひと、ほんのエピソードの数々が読書欲、旅欲を刺激する一冊。”

- ◇南陀楼綾繁 20210910 「[シリーズ 古本マニア採集帖：第 32 回] 村上潔さん 都市を回遊し本と音楽に出会うひと」, 『日本の古本屋メールマガジン』330(2021-09-10)
(https://www.kosho.or.jp/wppost/plg_WpPost_post.php?postid=7268)

◆ジャズ喫茶

- ◇20180427 「ジャズ喫茶：地下空間で大音量に浸る 真剣勝負、私語厳禁席も 神戸・元町」, 『毎日新聞』高知版, 23

“ジャズ喫茶：米国南部で発祥した音楽、ジャズを聞かせるための喫茶店。戦後、高額で入手が難しかったレコードに触れられる場として急速に普及した日本独自の形態とされる。1960～70年代には、学生運動など既成の枠組みに抵抗する若者が集う場として人気になった。その後店舗数は減少傾向だが、現在でも岩手県一関市の「ベイシー」や東京・四谷の「いーぐる」など全国的に名を知られる店もある。”

- ◇マイク・モラスキー [2005] 2017 『戦後日本のジャズ文化——映画・文学・アングラ』, 岩波書店 (岩波現代文庫)

<https://www.iwanami.co.jp/book/b287051.html>

“戦後、占領軍とともに入ってきて日本で復活したジャズは、アメリカそのものだった！ 映画、文学、映像作品などの中に表象されたジャズを読み解くと、同時代の日本の文化・社会が見えてくる。日本のジャズ喫茶に通いつめ、その独自性を鋭く指摘し、自分でジャズピアノを弾く著者が、日本語で初めて書いた画期的な戦後日本文化論。サントリー学芸賞受賞作品。”

- ◇マイク・モラスキー 2010 『ジャズ喫茶論——戦後の日本文化を歩く』, 筑摩書房

<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480873613/>

“活力と希望に溢れた音楽をめぐる空間。ピアニストであり日本文化研究者である著者が日本全国のジャズ喫茶を取材。今まで語られなかった異空間の真の姿を描き出す。”

- ◇田代俊一郎 [2011] 2013 『九州ジャズロード [増補改訂版]』, 『書肆侃侃房』

<http://kankanbou.com/books/culture/music/JAZZroad/0131kyusyujazzroad>

- ◇シュート・アロー 2015 『ジャズ喫茶が僕を歩かせる——現役ジャズスポットをめぐる旅』, DU Books

<https://diskunion.net/dubooks/ct/detail/DUBK119>

“ジャズ喫茶は昭和の遺産、と思いませんか？ 日本全国、今でも新規オープンしています！ ジャズ喫茶さえあればどこにでも駆けつけるサラリーマン、シュート・アローが、新旧いろいろなタイプのジャズ喫茶をとことん味わう人気シリーズ！ | 解説：林家正蔵”

- ◇株式会社都恋堂編 2016 『東京ジャズ地図』, 交通新聞社

<https://www.kotsu.co.jp/products/details/611068.html>

【引用】“ジャズ喫茶でジャズを聴いて、それをひとつの思想体験としたり、当時の演劇人なんか
も劇場に入る前はジャズ喫茶でフリージャズ聴いてたとか。でもフュージョンやロックの時代にな
って、そうした思想的な愉しみでジャズを聴く人が減ってきたんだと思いますよ。”(p.142:「評
論家 瀬川昌久さんが語る――東京ジャズ地図の変遷」)

◇常田カオル・谷川真紀子ほか 2020 『日本ジャズ地図』, 交通新聞社(散歩の達人
POCKET)

<https://www.kotsu.co.jp/products/details/611098.html>

“日本にしかないといわれる、音楽聴取を目的とした喫茶空間=ジャズ喫茶。好きな音盤をかけて
お茶を差し出すという決まり事だけが共通の店を訪ねる全国行脚。あなたも始めてみませんか?”

◇田代俊一郎 2021 「[九州近代歌謡遺聞:ジャズ編 493] はてしない物語」, 『西
日本新聞』2021年1月4日夕刊

<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/678909/>

【引用】“昼間からジャズを聴ける伝統的なジャズ喫茶は「数少なくなっています」と話す。飲食
が伴わなければなかなか店は立ち行かない。世代交代期でもある。ジャズの風景は大きく変わって
いる。土田は「『ジャズ喫茶』を知るには今からの5年間で大事だ。多くの方に回ってもらいた
い」と言う。”

(文責:村上 潔)

2021/11/05

■「女の子とコミュニティー——ジン・カルチャーの視点から見る神戸文化」
(『ガールズ・メディア・スタディーズ』刊行記念トーク:神戸編)

◇日時:2021年11月13日(土)18:30~20:45 *18:15開場

◇会場:1003 [センサン] (神戸市中央区栄町通1-1-9 東方ビル504号室)

◇トークゲスト:田中 東子(Tanaka, Tohko:大妻女子大学)
・村上 潔(Murakami, Kiyoshi:立命館大学)

◇参加費:学生500円 / 一般1,500円

◇定員:15名

◇参加申込:

〈1003〉店頭・メール(1003books@gmail.com)・電話(050-3692-1329)まで

“メールの場合、件名「ガールズ・メディアトーク」としてお名前・人数・電話番号・メールアドレス
をお知らせください。折り返し、当店からの返信をもって受付完了といたします。”(1003)

*新型コロナウイルス感染症の蔓延状況により延期・中止の可能性があります。

◇主催:1003 [センサン]

★Info → <http://www.arsvi.com/2020/20211113mk.htm>